

『こころ』先生の死に場所

Junko Higasa 2015.7.10

『私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こっそりこの世からいなくなるようにします。私は死んだ後で、妻から頓死したと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足なのです』これが先生の選んだ死に方である。

「こっそり」「頓死（急死）」「気が狂った」これらの言葉から思い浮かぶもの、それは藤村操の死、即ち華巖の滝への投身自殺である。

先生が厭世的なのは妻の静も承知のことである。そして「殉死」の会話もあった。すなわち先生は「厭世的になり、気が狂ったのか」と評された『ハムレット』の一場面と重なる藤村操の死を踏襲したのではないか。漱石は『草枕』で『彼の青年は美の一字の為に、捨つべからざる命を捨てたるものと思う。死その物は洵に^{まこと}壮烈である。只その死を促すの動機に至っては^{かい}解し難い。されども死その物の壮烈をだに体し得ざるものが、如何にして藤村氏の所作を嗤い得べき』と書いた。これを応用すると、先生は自分の良心・妻への愛・Kへの友情という、人間としての「美」の一字の為に、捨ててはならない命を捨てた。ただその死を促した動機は妻には解し難い。そして戦場で壮烈な死の場面を体験した乃木の殉死という所作を誰が嗤えようか。漱石に藤村操の、先生に乃木の、「私」に先生の心は解らないだろう。